

「私は主をほめたたえよう！」(要旨)

聖書箇所：創世記29章28~35節

【1】 主はレアが嫌われているのを見て

人は誰しも愛し愛されることを望みます。聖書に名を連ねる人々も例外ではありません。ヤコブはラケルを愛し、彼女と結婚するためラバンの下で7年間仕えました。ラバンはヤコブを欺き、長女のレアと結婚させます。ヤコブはラケルとの結婚を諦めることができず更に7年ラバンの元で働きました。レアは夫のヤコブから愛されることを願いましたが叶いませんでした。レアは妹のラケルよりも先に結婚しましたがヤコブに愛されていないことを知っていました(創世記 29:30)。レアはこの家族の中で辛く抑圧された立場にありました。しかし「主はレアが嫌われているのを見て、彼女の胎を開かれた…」(創世記 29:31)というのです。

主が抑圧された者、弱い立場に置かれた者を「見て／ご覧になって」(参照創世記 29:3,出エジプト 2:25)、必要な介入をされる場面が聖書に記されています。

かつて一人ぼっちで旅したヤコブに、主がベテルで現れ、ともにおられることを示してくださったことが思い出されます(同 28:11-17)。

【2】 今度こそ夫は…

レアは出産します。最初に生まれた子を「ルベン(子を見よ)」と名づけます。名前の由来は「主は私の悩みをご覧になった。今こそ夫は私を愛するでしょう」(同 29:32)でした。レアはこの出産が神の御業であると理解し、自信を取り戻します。ところが夫の彼女に対する態度は変わりませんでした。彼女は再び身ごもって「主は私が嫌われているのを聞いて、この子も私に授けてくださった」(同 29:33)と言って「シメオン(『聞く』意の語根『שמע』の派生語)と名づけます。彼女はさらにみごもり「今度こそ、夫は私に結びつくでしょう。

私が彼に三人の子を産んだのだから」(同 29:34)と言い、「レビ(『結ぶ』意の語根『לב』の派生語)」と名づけました。ラケルにないもので夫の歡心を買おうとしたレア。しかしヤコブのレアに対する態度は変わりませんでした。彼女の「主は私の悩みをご覧になった」や「主は私が嫌われているのを聞いて」という発言は、主が自分に目を留めて下さっている確信から出たものだったでしょう。だからこそ「今度こそ、夫は」と、夫が自分を愛してくれるようになると期待したのでした。

【3】 私は主をほめたたえよう！

四番目の子の出産の時です。彼女の告白がこれまでと変わりました。「今度は、私は主をほめたたえます」(同 29:35)。ユダは「ほめたたえる」という意味を持つ名前です。彼女に対するヤコブの態度は依然として同じでしたが、彼女の口から主への賛美が生まれたのです。レアはこれまで、自分が子を産むことで夫の心がかわることを願いました。その彼女が「今度は、私は主を…」と、自分の心を主に向けたのです。レアがこのように主をほめたたえたのはこれまでの自分の願いが実現したからではありませんでした。彼女は苦悩の中で主と向き合いました。その度に主が自分を見放しておられないことを経験しました。レアは主ご自身が自分の歩みに目を留めてくださっていることを覚えて主をほめたたえたのでしょう。

▷私たちは、何をもって、幸いな人生だと告白するのでしょうか。

